



桃香の自由帳



星奈優里

志村東吾 毛利恋子 伴 杏里
長内美那子 浜田 晃



企画のねらい

「共生社会と人権」～つながり・ささえあう わたしたちのまち～

核家族化や都市化が進む中、人々の地域などへの意識が大きく変わり、互いにふれあい、支え合うことが少なくなっています。そのため、同じ地域に暮らしていても、名前さえ知らなかったり相手のことを誤解して排除したりするなど、私たちは気づかぬうちに「人とのつながり」を自ら断ってしまうことがあります。

このドラマは、劇的な事件は描かず、どの地域でも起こりうる出来事に光を当てています。日常の何気ない言動を振り返ることで、現代を生きる私たちが見失いつつある、人と人が寄り添い、共に生きる温かな世界とは何かについて語りかけます。

東日本大震災後、改めて見つめ直されている「人と人とのきずな」。私たち一人ひとりが地域社会を担う一員として、助け合い、支え合って生きる共生社会を創造していくために、このドラマを制作しました。



企 画／兵庫県・(公財)兵庫県人権啓発協会
企画協力／兵庫県教育委員会
製 作／東映株式会社

販売価格
(消費税込み)

■ 上映時間 36分 販売価格84,000円 (本体80,000円)

DVD…字幕副音声版 [C#7375]
ビデオ…字幕副音声版 [C#7377]
ビデオ…通常版 [C#7376]



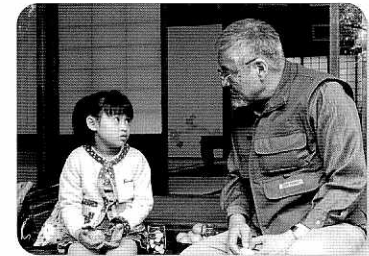
ある日、小学校2年生の入江桃香が学校から帰ってくると、母・日菜子は留守で、家の鍵も持っていない。どうしていいかわからず、近くの公園までやってくる。少し離れたベンチには、買い物帰りの山村秀次郎が座って、痛む膝をさすっている。そこにクラスメートの堂本志穂と母・恵里が通りかかり、桃香に声をかける。

日菜子が、夕食の用意をしながら桃香に「知らない人についていってはだめ」「友だちの家に行ったら迷惑かけるからだめ」と教えている。夫・幹夫は「そこまで…」とたしなめるが、日菜子は聞く耳をもたない。



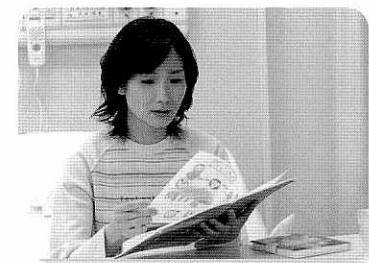
日菜子と内藤佐智子は、販売員を怒鳴って追い返す秀次郎と、不良に見える中学生と親しく話す恵里に出くわす。どちらにも関わりたくないと思う日菜子。恵里の昔の噂話も聞き、桃香が志穂と仲良くしていることで不安になる。一方、桃香は、クラスメートから仲間外れになっている志穂のことが気になって仕方ない。

そんなある日、桃香は秀次郎と再び公園で出会う。一人暮らしで、気難しいと疎まれていた秀次郎は、桃香の優しささと人懐こい性格に思わず心を開いていく。桃香もまた、自分の悩みをじっくりと聞いてくれる秀次郎の温かなまなざしに支えられ、ある勇気が生まれる。



放課後、下校する桃香たちの後ろで志穂が寂しそうに歩いているのを見て、桃香は心を決め、声をかける。二人は、恵里が働く地域活動のコミュニティカフェへ。そこで、恵里の中学校時代担任だった松子先生も働いていた。カフェに集う人たちと楽しげに過ごす桃香。そこへ連絡をもらい迎えに来た日菜子が、志穂たちに声を荒げる。

その帰り道、小さな反乱を起して日菜子の手を振り切る桃香。気づけば公園へ。そこへ秀次郎が通りかかる。秀次郎と一緒にいる桃香を見つけた日菜子はあわてて駆け寄るが、突然のお腹の痛みで倒れてしまう。病院で目覚める日菜子。秀次郎の機転のおかげでお腹の赤ちゃんも助かったことを知る。翌日、松子先生が、コミュニティカフェに忘れた桃香の自由帳を届けにやってくる。自由帳のページをゆっくりめくると、そこには、桃香の思いがぎっしりとつまっているのだった。



学習のねらい

- 登場人物の言動を通して「人とのつながり」を自ら断っていないか、日頃の自分自身の言動を振り返る。
- 「きずな」とは、人と人がつながり、共に生きる中で生まれ、それが生きることの素晴らしさや喜びにつながるということを認識する。
- 一人ひとりが地域社会を担う一員であることを自覚し、人と人との助け合い、支え合いについて、自分の問題として考える。

○スタッフ プロデューサー／鎌田幸人 脚本／山上梨香 監督／高橋 浩

関東営業推進室 東京都中央区銀座3-2-17 〒104-8108 ☎03-3535-3631
 関西営業推進室 大阪市北区梅田1-12-6 〒530-0001 ☎06-6345-9026
 広島出張所 広島市中区橋本町5-2 〒730-0015 ☎082-511-2066
 福岡出張所 福岡市博多区中洲4-3-18 〒810-0801 ☎092-262-3101